

ジビエモデル流通体系確立事業調査結果（概要版）

1. 調査の目的

本調査では、シカ（イノシシ）の「カタ、前スネ、後スネ^注」（対象部位）について、個別の処理施設が加工・販売する方式（従来方式）と、対象部位の収集及び発送を行う処理施設（地域処理施設）、対象部位の加工を行う処理施設（センター処理施設）に分業して加工・販売する方式（センター方式）について比較し、方式の違いによる利用量、コスト、作業に要する時間等について比較検討を行うとともに、対象部位の利用拡大に向けたセンター方式の課題を明らかにすること。

※本調査では、通常廃棄されることが多い前スネ・後スネのみならず、調理の難しさから販売しても売れる残ることが多いカタも入れることとした。

2. 従来方式とセンター方式について

（1）従来方式

- 各処理施設は、枝肉から脱骨された対象部位について、骨と精肉に分ける脱骨作業を行い、需要家に販売を行っている。
- 対象部位のうち前スネ、後スネの肉は1頭あたりで取れる量が少なく、またカタも含めたウデやスネのいずれもがロースやモモと比べて商品価値が低く、作業に手間がかかるなどの理由から、個体の搬入量が少ない小規模な施設は対象部位をそのまま廃棄している場合がみられる。

（2）センター方式

- 地域処理施設は、処理に手間がかかる対象部位をセンター施設に宅配便で配送する。センター処理施設は、地域処理施設から送られて来る対象部位を集中的に処理し、同部位の肉を大量に確保し、比較的安価な肉を安定して供給できる体制を確立する。
- 地域処理施設がこれまで同部位の処理に要していた作業時間の削減、手間の多さなどの理由から廃棄されていた同部位の有効活用、安価かつ安定的に供給できる体制の確立を図る。

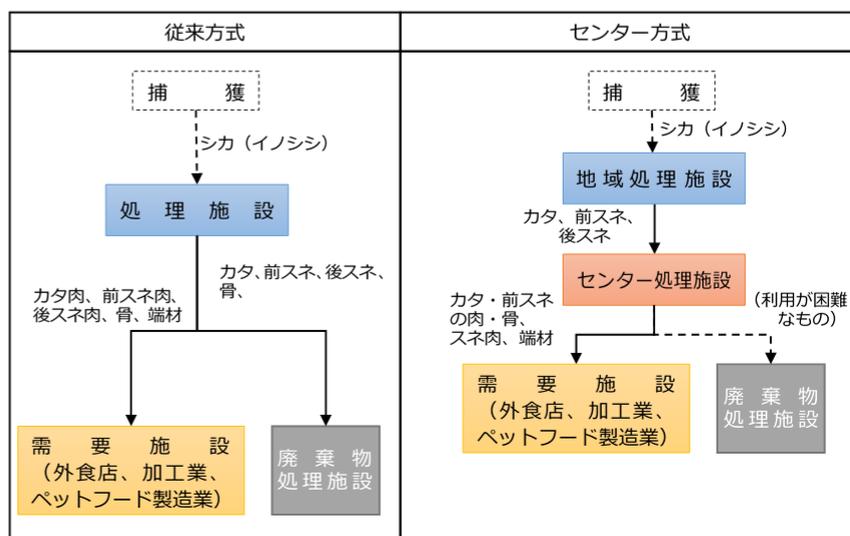


図1 従来方式とセンター方式の比較

3. 調査内容

【従来方式調査】

- 枝肉から解体した対象部位についての「脱骨作業」及び、精肉を保存するための真空パックでの「ラッピング作業」を対象とし、部位別重量、作業時間、脱骨後重量を計測。

【センター方式調査】

●地域処理施設

- 枝肉から解体した対象部位をセンター処理施設に発送するため、骨が付いている状態のままラップに包む「ラッピング作業」及び、段ボールへ梱包する「梱包作業」を対象とし、作業時間を計測。

●センター処理施設

- 地域処理施設から送られてきた対象部位の「脱骨作業」及び、精肉を保存するための真空パックでの「ラッピング作業」を対象とし、部位別重量、作業時間、脱骨後重量を計測。

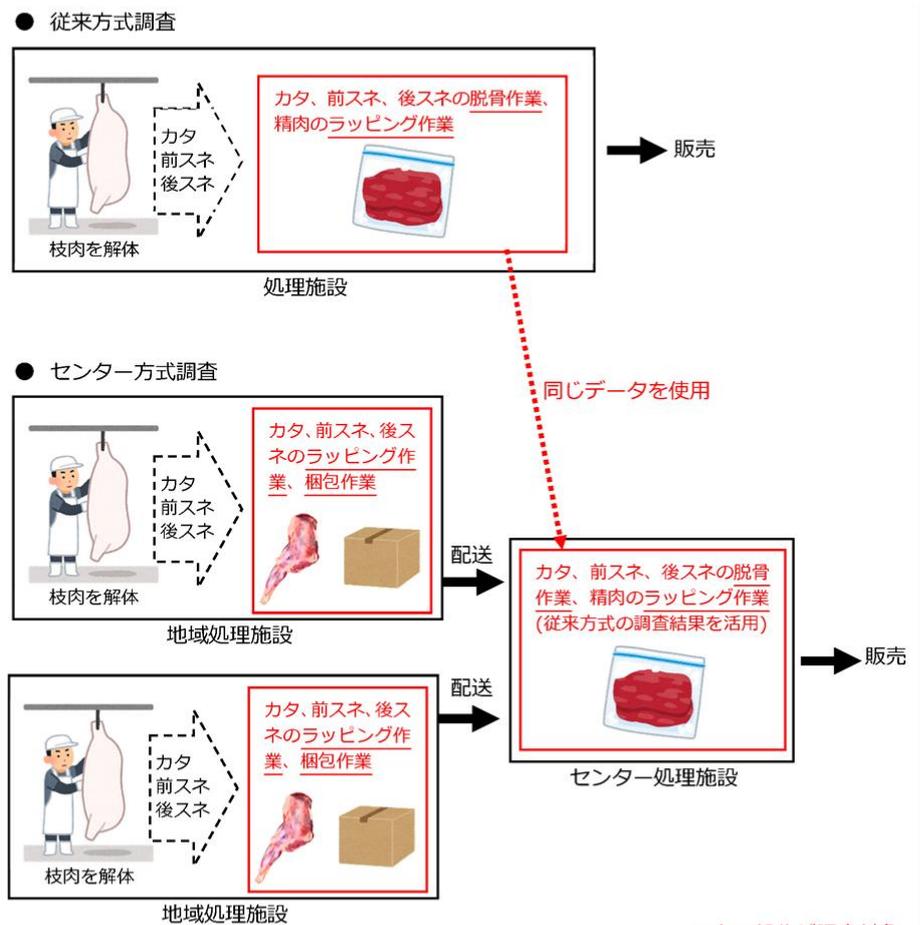


図2 従来方式調査とセンター方式調査における調査対象

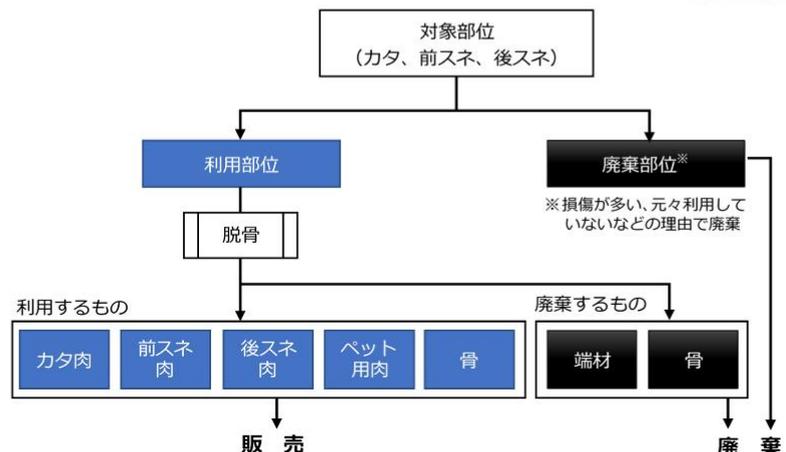


図3 対象部位の取り扱いの流れ (従来方式、センター方式)

4. 調査の結果（従来方式とセンター方式の比較）

調査結果をもとに従来方式とセンター方式について、1頭あたりの対象部位の利用量、作業時間、コスト、販売収益、利益の5項目をkgあたりに換算し、比較した。

表1 対象部位を廃棄した場合、従来方式、センター方式の比較（対象部位kgあたり）

区分	従来方式		センター方式		
	対象部位を廃棄した場合	骨のみを廃棄した場合	地域処理施設	センター処理施設	計
利用量(kg)	—	0.65	1.00	0.93	
作業時間(分)	—	5	8	5	13
コスト(円)	対象部位購入費	0	0	500	—
	対象部位配送費	0	0	107	—
	人件費	0	125	200	125
	消耗品費	0	7	0	7
	廃棄処理費	40	14	0	3
	計	40	146	742	—
販売収益(円)	0	877	500	988	—
利益(円)	▲40	731	300	246	—
利益率(%)	—	83	60	25	—

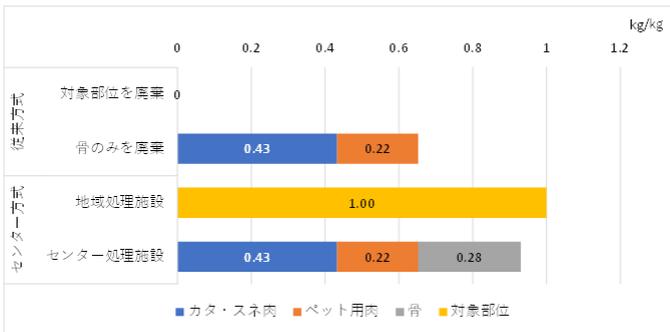


図4 利用量の比較（対象部位kgあたり）

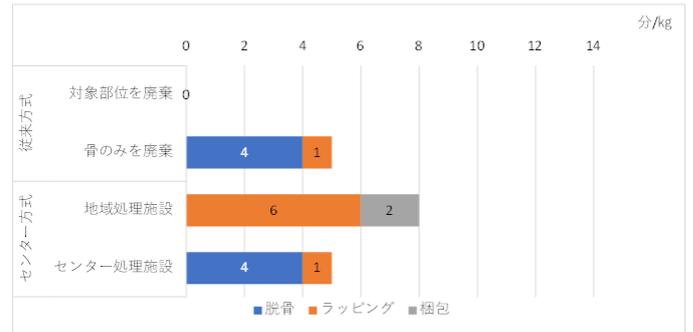


図5 作業時間の比較（対象部位kgあたり）

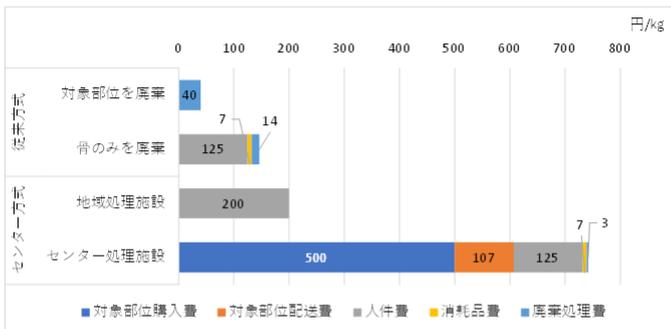


図6 コストの比較（対象部位kgあたり）

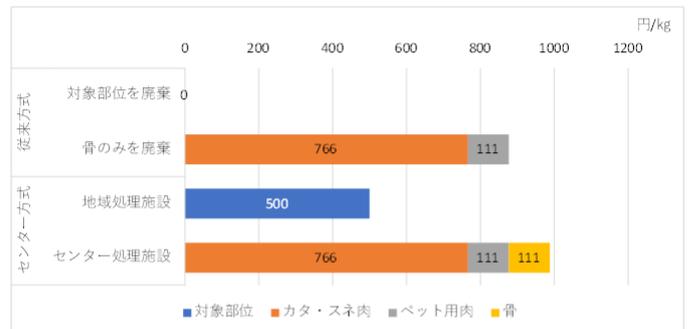


図7 販売収益の比較（対象部位kgあたり）

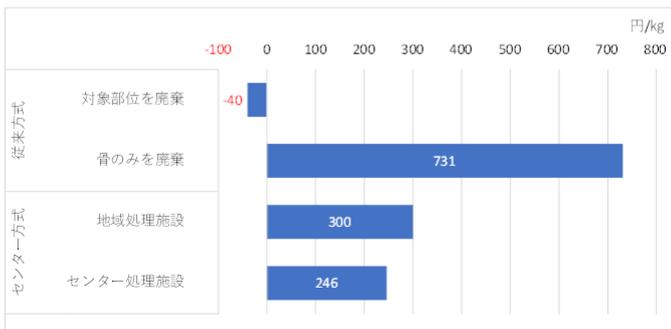


図8 利益の比較（対象部位kgあたり）

- 調査結果から、従来方式（骨のみを廃棄）が最も高い利益率になることがわかったが、小規模施設の実態としては「対象部位を廃棄した場合」が近いと考えられる。
- 比較的小規模な施設など、現在、対象部位を廃棄している施設は、センター方式に取り組むことで採算性が高まる。

5. 年間処理頭数と配送距離が与えるセンター方式の収益への影響についての検討

施設規模と配送距離の違いによる配送費の変動について検討した。

- 施設規模：比較的規模が小さな処理施設として年間処理頭数が 100 頭と 200 頭を設定。
- 距離区分：「近隣パターン」「中距離パターン」「長距離パターン」の 3 区分を設定。



図 9 距離区分のイメージ

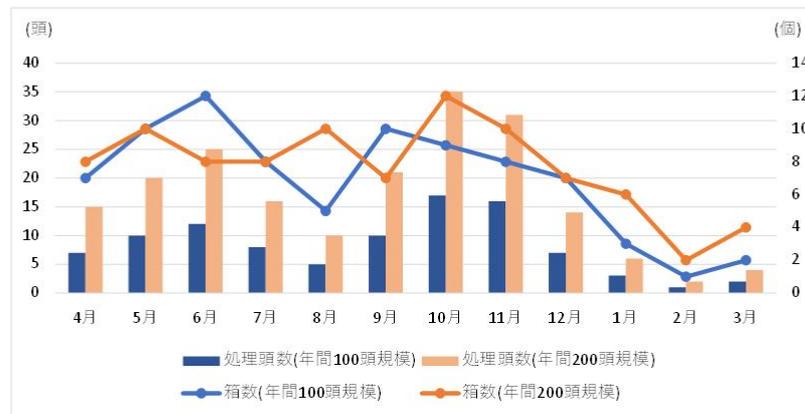


図 10 施設規模別処理頭数及び荷物箱数



図 11 施設規模と距離別の配送費の比較



図 12 施設規模と距離別のセンター処理施設における利益の比較

- 地域処理施設は配送費を支払わないため、距離にかかわらず一定の利益が見込まれる。
- センター処理施設は、処理頭数年間 100 頭規模では、近距離パターンであれば利益が出るが、中距離・長距離パターンともにも赤字。200 頭規模では、いずれも利益が出る。
- 100 頭程度の施設とセンター方式を実施する場合は比較的距離が近い地域内とし、200 頭程度の規模であれば距離が離れていてもある程度の利益は期待できる。
- センター方式で大口への販売を行うことで販売単価が下がると考えられることから、効率化、コストの削減が重要となる。

6. 本調査結果についてのまとめ

● センター方式の効果

年間処理頭数が多く、対象部位の販路を確保できるなどで精肉の販売面において特に問題が無い施設は、センター方式に取り組むことによる直接的な収益面でのメリットが従来方式と比べて小さい。一方、小規模施設など対象部位の販路が確保できず、精肉の販売があまり期待できない施設はセンター方式に取り組むメリットが大きいと考えられる。

● 部位購入費と配送費のセンター方式への影響

センター方式では従来方式と比べて処理施設の1頭あたりの利益が少なく、配送費や部位の購入費がコストとしてセンター処理施設の利益に大きく影響を与えた。特に配送費については、小規模施設の場合、地域処理施設・センター処理施設間の距離が近距離でなければ利益がでなかった。

7. センター方式の普及を図る上での課題

① 安定した供給体制の確立

- センター処理施設では各地域処理施設から不定期に送られてくる対象部位を一時的に冷蔵保存する冷蔵設備が必要。また、脱骨した精肉をストックする大型の冷凍庫が必要。
- 安定供給を行うために可能であれば近隣だけでなく広域的に複数の処理施設と連携することが必要であり、各施設についての情報提供や施設相互の連携を促すコーディネーター的な役割を担う組織や仕組みづくりが必要。
- センター方式では多くの部位の精肉等を取り扱うことで、より幅広い需要に対応できる体制とすることが必要。

② コストの削減

- センター処理施設での脱骨作業は作業員の熟練具合が大きく影響するため、熟度の向上、複数人による分業化で作業効率を高めるなどの対策が必要。
- 捕獲頭数が少ない施設は必然的に一度に送ることができる対象部位の量が少なくなり、配送費が高くなってしまいうため、脱骨後の精肉を冷凍保存し、配送容量一杯までためて送るなど、配送コストを削減するための工夫が必要。
- 発生した廃棄物の処理経費は利益に悪影響を与える一方、有価物として販売すれば少しでも利益に結び付くため、できるだけ活用することが必要。

③ 歩留の向上

- 食肉向けやペット向けの商品としてできるだけ肉を有効活用し、廃棄量を減らすことで、全体での歩留を高め、利益を高めることが必要。

④ 作業量の平準化

- 施設への搬入個体数は狩猟期など時期によって増減があるため、骨が付いた対象部位に限定することなく、脱骨後の精肉の状態でも送ることも可能にするなど、処理施設の作業量を平準化することが必要。

⑤ ジビエの信頼性の向上

- 大手外食チェーンなどの大口需要家への供給を行うにあたって、各処理施設はより高い安全性や衛生レベルを確保することが必要。

8. センター方式の将来モデルイメージ

前述の課題を踏まえたセンター方式の将来モデルのイメージを次に示す。

